

【学会報告】

The 27th European Sport Management Conference 参加記

庄司直人*¹ 仲井間 嵩*¹

I. はじめに

2019年9月3日から6日にスペインのセビリアで行われた第27回ヨーロッパスポーツマネジメント学会(The 27th European Sport Management Conference: EASM2019、The European Association for Sport Management 主催)に参加した。本稿では、その際の活動や学会の様子、現地の様子について報告する。

EASMへの参加は今回が初めてだった。きっかけは本学に着任し、それまでに毎年参加していた国際学会の開催日程が授業と重なり参加を断念せざるを得ない状況となり、スポーツマネジメント関連の国際学会への参加を模索するなかで、8月末から9月の初旬という日程と、開催地のセビリアに惹かれたことであった。

そして、今回の学会には健康スポーツ科学科2期生の仲井間嵩がともに参加した。彼の存在もEASMへの参加を決めることを後押しした。EASMでは通常の学会と並行し、約一週間におよぶ大変充実したスチューデントセミナーが催されている。彼には当初そのスチューデントセミナーに参加し今のヨーロッパのスポーツビジネスを学ぶことを勧めていたが、結果的に彼は共同研究者の一人としてこの学会のプロシーディングに名を連ねることになった。その経緯は、順天堂大学の共同研究者と計画していたリーダーシップに関するシステマティックレビュー研究に関心を持った彼が、レビューにおいて、競技スポーツを対象とした研究であるか、介入研究であるかをジャッジする段階で大きく貢献してくれたことに端を発し、一連の頑健な手続きをともに進めることとなった。そして、我々の研究(Systematic Review of Intervention Research on Leadership for Strengthening Competitive Athletic Teams)は無事アクセプトされ今回の発表に至った。

II. 開催地について

開催地セビリアはアンダルシア州に位置し、スペイン第四の都市である。気候は非常に暑く乾燥している。飛行機の乗り継ぎ地マドリードは涼しく感じたが、セビリアは日差しも強いので日向にいと非常に厳しい暑さを感じる。市内は世界遺産や歴史的建造物で溢れている。我々に特に強い印象として残っているのはセビリア大聖堂である。外観もまさに壮観であったし、中に入っても細部まで作り込まれた装飾の美しさと、そのスケールの大きさに圧倒された。そのセビリア大聖堂周辺は、歴史が随所に垣間見えるだけでなく、近代的なショッピングの街にもなっており、日本で言えば、原宿表参道周辺の賑わいにも通ずる雰囲気を感じた。

そして、宿はセビリア大聖堂から徒歩15分程のアラメダ・デ・エルクレス(Alameda de Hercules)のアpartメントにした。学会会場とは若干離れていたが、アラメダ・デ・エルクレスに宿をとったのは正解であったと思う。アpartメントは、地元の人々も観光客も行き交うアラメダ・デ・エルクレス広場のすぐそばに位置しており、オフの時間もとても楽しく満喫することができた。アラメダ・デ・エルクレスは、昼間は静かであるが、16時ごろから賑わいを見せ始め、広場を取り囲むように軒を連ねるバルで食事を楽しむ人々に溢れる(バルの食事は大変美味しい!)。その賑わいはおよそ翌日2時ごろまで続いている(日没は21時頃)。広場には遊具もあり、子どもたちも22時30分ごろまで、元気に遊んでいる。サッカーをしている子どもも多く見られるが、本当に激しくボールを奪い合っているのを見ると、スペインがサッカー強国であり続けるのも納得である。

受付日 2020.1.28

*1 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科



図 1 会場近くのスペイン広場



図 2 レセプションパーティーの一コマ



図 3 アルカサルでの仲井間



図 4 奥の建物がセビリア大聖堂

Ⅲ. 学会について

学会会場はセビリア大学付近のメリア セビリア (Melia Sevilla) であった。こちらも観光名所スペイン広場 (Plaza De Espana) のすぐそばで思わず観光に足が向いてしまう好立地であった。運営はセビリア大学の学生、大学院生、スタッフが担い、期間中は快適に過ごすことができた。街中の人々もそうであったが、みなさんととても親切でなんでも柔軟に対応してくれるので、とても気持ちの良い学会であった。

参加者を見ると、ヨーロッパだけでなく、アジア、オセアニア、アフリカからも多数参加があるような印象を受けた。発表演題を見ると、基調講演をはじめ、今のヨーロッパのスポーツビジネスを反映するものが多く、これからスポーツがどのような方向に向かおうとするのかを肌で感じる良い機会となった。そして、ヨーロッパの学会ではあったが、アジア諸国の存在感は大きく、経済成長とともにスポーツ界でもアジア諸国がますます存在感を大きくするのではないかという期待を持つこともできた。やはり巨大マーケットである中国、インドへの注目度は非常に高い。とりわけ、インドのクリケットへの期待は大きいと感じた。そして、AI と通信技術によりスポーツがどう変化していくのか、これは大きなテーマである。スポーツそのものの変化ではなく、AI や新しい通信技術を使ってスポーツの楽しみ方をどう変えていくのかが、特にマーケティングに近接する領域を専門とする研究者たちの最大の関心事のようである。また一方で、スポーツマネジメントの学会であるが、発表内容は多岐にわたりスポーツに関わる社会科学の研究であれば受容されるであろう。EASM は本学でも多くの先生が発表の機会を得ることのできる学会であるようにも感じた。

日本人研究者は我々を含めて 20 数名の参加があったのではないだろうか。スポーツマネジメント学会で活躍される先生方、大学院生の方々が多く参加されていた。もう少し多くの日本人研究者も来ていたかもしれないが、我々が接触したグループを中心に考えると 20 名ほどであったように思う。

IV. 発表について

我々の研究はポスター発表でエントリーした。ポスターセッションは指定の時刻に掲示し、掲示後別室に移り、それぞれ発表者に持ち時間が与えられ口頭で発表し、その後ポスターの掲示場所に戻るというスタイルであった。別室でのプレゼンはポスター以外の資料を用意することも可能であり、時間が短いこと以外はオーラルセッションとほとんど変わりがなかった。そのプレゼン以外に掲示場所で質疑があるため非常に充実した時間であった。ただし、別途資料を用意することと、ショートプレゼンテーションがあることは告知されていたものの、別室で行うことがセッション開始直前に座長から発表者達へ知らされたため、座長と発表者間での直前のやり取りは大いに混乱していた。セッション開始直前の短い時間で大小さまざまなトラブルを解決していたため、セッションが始まる頃には発表者間で不思議な連帯感が出来上がっていた。実際にショートプレゼンテーション内で、急遽実物のポスターを使用することになったが、写真のように快く力をお貸しくださった。お力添えくださったお二人の先生には心より感謝申し上げたい。



図5 ショートプレゼンテーションの一コマ
アジア人3名による即興的連携

今回の発表内容は、競技スポーツを対象としたリーダーシップトレーニングの介入研究の動向をシステムティックレビューで明らかにするというものであったが、意外な結果が出たこともあり、多くの研究者が足を止めてくれた。国際学会で発表を行うたびに思うことは英語力を磨こうというものであり、今回も今回こそは次回までに…と固い決意をした。

V. 終わりに

次回のEASMは9月16日～19日にラフバラ大学(Loughborough University London)がホストとなり開催される。EASM2020は学会としても充実した内容となることと思うが、ブregジット後のロンドンを見る機会にもなり楽しみにしている。ぜひ研究成果を蓄積しロンドンの地を訪れたい。

